

## 2009 年度 卒業論文講評

2010 年 2 月 小関 隆志

### 長谷川 佳祐「正規労働者のサービス残業の現状」

最近、派遣など非正規労働者の問題が取りざたされていますが、フルタイムで働く正規労働者の側も、人数が減らされて過剰な労働を押し付けられているという深刻な問題があります。いわゆる「名ばかり管理職」や「名ばかり店長」は、経営者が残業代を支払いたくないために、労働者に何も権限を与えず責任や義務だけを押し付けた象徴的な事例ですが、表に現れてこないさまざまなしわ寄せが労働者に行っていることは想像に難くありません。正規労働者は家族を養う責任から、職場で不条理を押し付けられても泣き寝入りをするしかなく、表に現れてこないのでしょう。

長谷川さんが取り上げた問題は「サービス残業」、つまり残業代無しのただ働き残業です。長期的にみれば日本の労働者の労働時間は短くなっていますが、それでも西欧諸国に比べればまだ所定外労働時間は長いといえます。労働時間の長さ自体も問題ではありますが、長谷川さんは労働時間の長さだけでなく、残業代の問題に着目しました。本来は労働に見合う対価を受け取って当然ですが、そうした正当な対価を受け取れないところに問題の深刻さがあります。

長谷川さんが就職先に選んだ IT 業界では、納期に合わせて仕事をするため、ときには極めて長時間の労働を余儀なくされますが、その労働時間の全てに賃金をもらうことは難しいようです。また、長谷川さんがアルバイトをしていた飲食業界では、また別の形のサービス残業が存在しています。そのため、「サービス残業」と一口に言っても、業界によってその実情は違うのではないかと考えました。

長谷川さんは、不動産業の A さんと、IT 産業の C さんに話を聞くことができました。残業時間の統計だけでなく、具体的な事例を現場の人から聞くことにより、サービス残業の問題をより深く理解することにつながったようです。

全体としてよく書けていますが、「残業をいかに減らすか」という問題と「サービス残業をいかになくすか」という問題は別次元の問題であり、本来は後者に特化して議論を進めるべきでしょう。ただ、本論文では両者が必ずしも截然と区別されておらず、結論の内容も十分に練られたものではなかったのが残念なところです。

長谷川さんはこれから正規労働者として、自分自身の問題として残業のあり方、サービス残業の問題に向き合っていくなくてはなりません。今後の活躍に期待したいと思います。